

PB-29.**マウス実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎 (EAU) における ICOS/B7RP-1 経路の関与**

(眼科学)

○白井 嘉彦、竹内 礼、竹内 大
毛塚 剛司、鈴木 潤、大井 桂子
白井 正彦

【目的】 実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎 (EAU) は IRBP 特異的 CD4 陽性 T 細胞 (Th1) により惹起されることが知られている。近年、抗原提示細胞上に発現する B7RP-1 分子のリガンドとし、CD28 ファミリーに属する補助刺激分子である ICOS が T 細胞の活性化に重要であることが明らかになった。今回我々は、抗 B7RP-1 抗体 (HK5.3) を投与することにより EAU の発症を抑制できるかどうか検討した。

【方法】 IRBP ペプチドを完全フロイドアジュバンドと共に C57BL/6 マウスに強化免疫し、EAU を作製した。このモデルに、HK5.3 または、そのアイソタイプコントロール抗体を免疫前日より免疫後 21 日目まで、隔日 (400 μ g) 腹腔内に投与する群 (A)、誘導期に投与する群 (B)、発症期に投与する群 (C) に分け、免疫後 14 日目と 21 日目に臨床スコアを細隙灯顕微鏡で評価し、病理組織学的な EAU 発症の重症度および遅延型皮内反応を免疫後 21 日目に評価した。*in vitro* の解析として、免疫後 21 日目に、脾臓および所属リンパ節を摘出し、IFN-g と IL-4 産出能を ELISA により測定した。また ICOS ノックアウトマウスにおける EAU の検討も行った。

【結果】 A 群と B 群において、EAU の臨床スコア、病理スコア、DTH ともにコントロール抗体投与群に比べて有意に HK5.3 投与群では低下していた。ICOS ノックアウトマウスでは、野生型マウスに比べて病理スコアと DTH 反応ともに低下していた。ELISA においては、B 群では HK5.3 投与群の脾細胞、所属リンパ節の細胞ともに IFN-g の産出が低下していた。

PB-30.**星膠腫群の細胞診**

(病理学講座)

○石川 章夫、藤田 浩二、工藤 玄恵

【はじめに】 Stereotactic biopsy や神経内視鏡による微小な脳腫瘍検体の術中迅速凍結組織標本には診断に影響するアーチファクトが危惧されるため、微小検体時には細胞診の方が有利である。細胞診は標本作成が簡単で、細胞の保存性も良好、しかも迅速かつ経済的である。今後、細胞診は脳腫瘍病理診断法として、より重要になると考えられる。今回、最も頻度の高い脳腫瘍である星膠腫群の細胞学的特徴を検討した。

【方法】 星膠腫群 (Grade II 2 例、III 2 例、膠芽腫 5 例) のパパニコロウ染色の圧挫標本における細胞の出現具合や細胞個々の特徴を観察した。

【結果】 細胞は集塊として、あるいは孤立性に出現していた。ライトグリーンに均質に染色される背景は細い線維性基質からなっていた。孤立散在傾向は high-grade になるほど強く、膠芽腫では最も顕著で、さらに核異型の強い大型細胞も孤立性に散見された。核所見は low-grade では類円形で薄い核膜と微細なクロマチンであるのに対し、high-grade では核の大小不同および不整、粗顆粒状クロマチンが見られた。

【考察】 圧挫標本における星膠腫群に特徴的な所見はライトグリーンに染まる線維性集塊であった。加えて出現様式、核密度、核所見を観察する事で grading も可能と考えられる。特に核の異型度は grading に重要であった。微小検体による脳腫瘍術中迅速診断において細胞診は必須な診断法である。